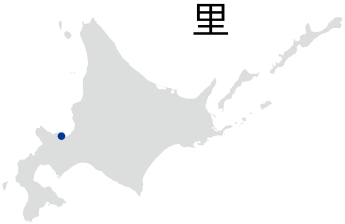
駅まち叙景 Final in 朝里

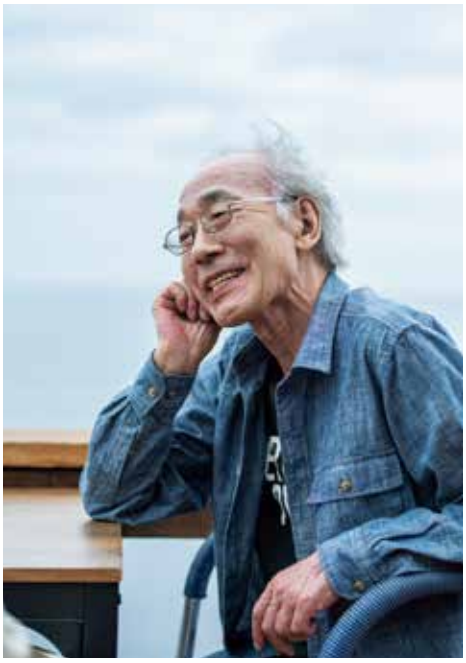
風景を物語にする。

駅とまち、人を巡る旅は、いよいよ終着駅へ。連載エッセイと表紙絵で、小誌『ＴｈｅＪＲＨｏｋｋａｉｄｏ』に豊かな物語を紡ぎ、読者の心に明かりを灯し続けてくださった小檜山博さん、藤倉英幸さんを朝里駅にお迎えし、列車と駅、人生、そして創作の旅について伺った。

小檜山 博

昭和12年、滝上町生まれ。作家、神田日勝記念美術館名誉館長。『出刃』で北方文芸賞受賞。『光る女』で泉鏡花文学賞、北海道新聞文学賞を受賞。平成17年、北海道文化賞受賞。平成19年、北海道功労賞受賞。平成11年4月から本誌にエッセイを寄稿。





藤倉 英幸

昭和23年、岩内町生まれ。イラストレーター、デザイナー、貼り絵作家としてポスター、カレンダー、壁画デザイン、版画など幅広く活動。北梅道の四季折々の風景を、色彩あふれる貼り絵で詩情豊かに描く。平成4年5月から本誌の表紙絵を担当。

――印象に残った旅の風景や駅にまつわる忘れがたいエピソードをおきかせください。

藤倉　一昨年、取材で宗谷を訪れた際に気付いたのですが、名寄を過ぎたあたりから景色が一変する。水田や畑にかわって酪農地帯が広がっていく。耕種には向かない土地なのでしょう。豊富駅で列車を降りて自転車で海へ行きました。三、四時間かかったかな。サロベツ原野で見たのも一面の牧草地。酪農の風景でした。取材旅行はいつもＪＲかバス、そして徒歩。道内は内陸も沿岸もほとんどを回っていますが、やはり北海道は面白いなあと感じます。

思い出の駅というと、国鉄の岩内駅でしょうか。かつて小沢から岩内へ行く岩内線がありました。高校生の頃に、泊村から岩内高校へバス通学をしていたのですが、バスの待合所と岩内駅がすぐそばで、学校帰りは駅の中でバスを待っていたものです。その方が楽しかった。ここからいつでも遠くへ行ける。そんな夢がふくらんでいたんですね。小檜山先生の故郷にも線路がありましたでしょう。

朝里駅（JR函館本線）

小樽市朝里1丁目
明治13年、官営幌内鉄道の手宮（小樽）・札幌間の開通に伴い開業した北海道最古の駅の一つ。
駅を出ると、道を一本挟んで海原が広がる。

小檜山　オホーツク地方を走っていた渚滑線。終着駅が北見滝ノ上でした。

子どもの頃、「汽車」に乗って地球の裏側まで行けると思っていました。駅に行くと、心がざわめいた。それは、「ここから他のどこかへ」という希望だったのです。

十五歳の春、苫小牧の高校へ進学するために滝上を発った。渚滑、紋別、遠軽、岩見沢と、乗り換え、乗り換えて、片道十二時間。その道程を親父が一緒に来てくれました。苫小牧に着いて、寄宿舎で自炊するぼくに七輪とか必要なものを買って。そして帰るとき、親父は駅で自分の腕時計を外してぼくにくれた。「ないと不便だべ」と言って。ベルトが破れたその腕時計も、改札口に向かう父の後ろ姿も、七十年経った今でもぼくは鮮明に覚えています。

――創作活動において、旅はどのような影響を与えているのでしょう。

小檜山　取材や講演で、列車には数えきれないほど乗ったけれど、同じ路線でも車窓から見る景色は毎回違う。季節や時間ではなくて、乗るときの心で変わるのです。その旅でしか見ることのできない一篇のドラマが車窓にはある。もちろん人が乗り合わせる車内にも物語はあります。席を譲ったり譲られたり、具合が悪くなった人を介抱したり。最近では少なくなりましたが。

ぶるうはうすテラス席にて。

藤倉　列車でしか見られない風景があるから、ぼくはよく車窓に向かいカメラを構えている。写真自体は記録でしかないけれど、旅の途中でみつけた何か、道の辺に咲く花だったり、空気や思いを足していく。そうすると、風景が立ち上がってくる。絶景ではなく、日常の何気ないシーンの中に人のぬくもりがある風景が。行く先々を歩いて、人や風土にふれて、そうしたものをみつけるアンテナを錆びないようにしたいと思っています。

小檜山　小説でもエッセイでも、描くのは人間の情念というか情緒だけど、そういったものを育てるのは何なのか。たとえば駅には、人の門出や別れ、人生、喜怒哀楽のすべてがある。そこに居るだけで人間模様が見える。渚滑線は廃線になったけれど、北見滝ノ上駅は今もあります。そこに行くと、起こったことが蘇る。ぼくが書く物語は、ほとんどこう

いう場所で起こったことです。情緒を養うのは、人との関わりに他ならない。失われつつある線路や駅が、人間をつくってきたのだと思います。

藤倉 確かに、むかしの路線図を見ると、大動脈があって、中動脈があって、血管のように鉄道網が通っていた。

小檜山 岩内線も、胆振（いぶり）線も、全部ありました。

藤倉 子どもの頃から見てきたたくさんの風景は、私たちの旅の原点ですね。

――『The JR Hokkaido』の旅は、ご自身にとってどのような旅となりましたか。

藤倉 今年で三十二年。とにかく「北海道の匂いがする表紙」を心掛けて描いてきました。毎月、誌上で展覧会をしたようなものかもしれない。月刊の車内誌の連載があったから、北海道の風景を描き続けるという道が定まったのだと思います。ぼくの絵の方向性と貼り絵という描法、作風が決まったのはこの仕事のおかげです。筆で描いた時もありましたが、やっぱり貼り絵。これがぼくの個性なのでしょう。絵を見て、あの人の絵だなって思ってもらえるのは、続けられたからこそだと思います。

小檜山 文芸誌の場合は比較的に読者が見えていますが、読む人が広範囲なこの誌の場合考えたことは、自分自身を書く以外にないと思いました。つまり北海道に生まれて、ここの風土によってつくられた自分の生きざまを書くことだと考えたのです。ぼくの心と体を支配しているのは生まれ育った北海道の風土だと思っています。その北海道に根を張り、ここの風土からの風圧を受けながら生きる自分の生きざまを書くことにしました。うまく書けたとは思いませんが、この北海道を代表する冊子に連載させていただけたおかげで、自分の生きてきた軌跡をたどることができたと思っています。汽車は希望への揺りかごでした。心から深く感謝いたします。

ふたりの言葉の「間」を埋めるように時折、ウミネコと汽笛が鳴いた。すぐそばに駅があるのだ。旅の夢、そのざわめきは、潮騒のように止むことはない。

ぶるうはうす（ロケご協力）

小樽市朝里1丁目5-9　TEL 0134-26-6321
営業時間 月-土 11:00-17:00（L.O. 16:30）
定休日 日曜日・祝日
Instagram:@bluehouse_asari

記事の内容は取材日（2025年7月4日）時点のものです。
予告なく営業時間の変更や休業などの場合があります。ご利用の際は予めご確認ください。